

伝承遊び研究考(4) ——「伝承遊び」の分類について——

大 森 隆 子

A Study of Traditional Games (4)
—The Classification of “the Traditional Games”—

Takako ŌMORI

はじめに

筆者は、幼稚園や保育所の保育教材という側面から「伝承遊び」に関心を持ち、「かごめかごめ」や「花いちもんめ」など具体的な遊び数種を取り上げ、主として文献面から考証を行ってきた。そこから抽出された遊びの魅力や特徴、意味などを保育の場への提言という形で報告¹⁾を行った。こうした事例研究を進める過程で、改めて「伝承遊び」という用語を明確にしたいと考え、“伝承遊び”“伝承”“遊び”とそれぞれの語に拘わりつつ3稿²⁾に渡って検討した。

今回は、角度を変えて「伝承遊び」を分類という視点から考察したい。「伝承遊び」の世界を探索するに際して、さまざまな論者が構想した分類法を整理しておこうと思うのである。各氏は伝承遊びの記録や集約・紹介にあたって、自身の「伝承遊び」論を踏まえたそれぞれの分類型を設定し、具体的な遊び群を種別化した上で発表した。

本稿では、各方面から「伝承遊び」に関心が向けられた1960年代から1980年代にかけての分類型を取り上げる。この時期、子どもを取り巻く環境変化の中で急速に衰退していく「伝承遊び」に、様々な学問領域からその収集や記録・考察などが精力的に実施された。初めに、それらの先行例の一つといえる北原白秋編『日本伝承童謡集成』（1947年）(1)を紹介した上で、町田嘉章・浅野健二の『わらべうた』（1962年）(2)を、続いて上笙一郎の『日本のわらべ唄』（1972年）(3)と尾原昭夫の『日本のわらべうた』（1972年・1975年）(4)を、最後に小泉文夫の『わらべうたの研究』（1969年）(5)をと、順次5氏の分類例を検証する。これらを通して得られる分類型や種別例を比較し、さらに相互の関係性などを検討しつつ、「伝承遊び」に関する構造化や体系化の手掛かりを入手したい。結果として、「伝承遊び」研究の一助となれば幸いである。

* 教育学部 子ども発達学科

1 北原白秋編『日本伝承童謡集成』について

本書³⁾は、詩人北原白秋が長期間に渡って収集した日本全国の伝承童謡を、白秋の没後、門弟たちの手によって世に送り出されたものである。編纂校訂の任を負った薮田義雄は出版の経緯について次のように記している。

編纂者北原白秋先生が古今の伝承童謡を集大成して、これを文献として後世に遺したいということを発願されたのは、決して昨日や今日に始まったものではない。即ち大正末期から雑誌『赤い鳥』『近代風景』などを通じて資料の蒐集に着手され、その稿は積んで三千枚に達するに至った。(中略)

今にして思えば、この頃すでに先生は死を予感して居られたのではないかと考えられる。そのあらはれが、二十年宿願の伝承童謡蒐集の完成に向かって先生を駆り立てたのではあるまいか⁴⁾。

こうして昭和 17 年に開始された労作は、第一巻「子守唄篇」が 1947 年に、第二巻「天体気象・動植物唄篇」が 1949 年に、第三巻「歳事唄・雑謡篇」が 1950 年に国民図書刊行会から出版されるという形で実現した。引き続き「遊戯唄篇」を出版する予定であったが、諸般の事情で未刊に終わった。この全集を(未刊分を含めて)、改めて全六巻(当初は五巻としていたが、後六巻構成とする)として発刊したのが、三省堂版の『日本伝承童謡集成』全六巻⁵⁾である。

そもそも本集成の基となる伝承童謡の定義、もしくは範疇などについては、広義の「わざうた」の意に解釈したとある。その経緯は、次のような解説を通して明かされている。

童謡とは何ぞやの問題。何処までを童謡として認めるかの問題。この点から先ず解決していかないことには選の基準も立たないわけで、自然これがまた論議の的になった。

一体、この童謡なる語が古典の上に表れたのは『日本書記』を以て嚆矢とすると謂はれているが、当時は「わざうた」として訓じて今のやうに「どうえう」とは読まなかった。この「わざ」は神業の意で、神が時の異変を謡はしめるものの呼称であり、また、或る作業をなしつつ歌ふ労作唄のことであった。児童も歌ったであろうが、ほんとうの意味での「わらべうた」でなく、つまりは一種の「はやりうた」の類であった⁶⁾。

このように対象を児童の唄とするのではなく、古説の「わざうた」と解して幅広く掲載することとした。すなわち、これらを文献として世に提供し、後の研究に資することを主たる目的としたのである。

本書の構成は、収集例の詩句が表す歌柄(歌詞の内容)と採集地の二要素から成る。歌柄の種別は、子守唄、天体気象、動物、植物、遊戯唄、歳事唄、雑謡の 7 種で、江戸時代の先行例(行智編『童謡集』他)、並びに後継諸氏の説を基としている。採集地の区分としては、関東、北海東北、東海、北陸、近畿、中国、九州の 8 地域とした。

まず第一巻は子守唄篇とし、「ねんねのお守はどこへ行た」などのわらべ唄を 8 地域(全国)から 3500 編収録した。子守唄というものは、われわれの心の故郷であり、日本人の血脈を象徴する特別な唄であるから、この子守唄篇こそ本書の根幹を成す第一巻にふさわしい選定とした。第二巻は「お月さまいくつ、十三七つ」など天体気象の唄が 1204 編、「ほ

うほう、蛭来い」など動物の唄が2243編、「つつん、土筆の子、どこ継げだ」など植物の唄が382編と、3つの歌柄ごとに8地域別に掲載（歌詞の採集地は都道府県名で付記）されている。第三巻、第四巻、第六巻は遊戯唄篇の上、中、下とし、第三巻は関東地方の遊戯唄、第四巻は東北地方の〈手毬唄〉と〈手玉唄〉、並びに北陸地方の遊戯唄、第六巻は東海、近畿、中国、四国、九州の各地方の遊戯唄を紹介するという構成である。第五巻は「お正月がござった」など年中行事に伴う歳事唄875編と、「人真似小真似」など子どもの日常生活種々相を歌った雑謡2570編を8地域別に収録してある。

本集成の過半数（約1万編）を占める遊戯唄については、遊びの種類別に〈手毬唄〉〈手玉唄〉〈縄跳び唄〉〈羽根突き唄〉〈鬼遊びの唄〉〈お手遊び唄〉〈数え唄〉〈雑謡〉と8分別されている。その上で〈鬼遊びの唄〉には、《人あて鬼》《円陣鬼》《輪遊び鬼》《鬼きめ》《鬼からかい》《鬼ごっこ》《じゃんけん》の区分が、〈お手遊び唄〉には、《お手あわせ》《手あそび》《綾取り遊び》《握りつつき》《おはじき》《品きめ》《指あそび》《顔あそび》の区分が、〈雑謡〉には《草履かくし》《子取り》《人とばし》《通せんぼ》《尻たくり》《押し合い唄》《別れる時の唄》《子をあやす唄》《尻取り》《早口唄》《雑謡》の区分が試みられている。

2 町田嘉章 浅野健二篇『わらべうた——日本の伝承童謡——』について

この書⁷⁾は、邦楽・民謡研究家の町田と日本歌謡史・国文学研究家の浅野により出版された。『わらべうた』という書名であるが、副題に「日本の伝承童謡」と銘打っていること、またその構成において前述した『日本伝承童謡集成』の方法——配列は歌柄別と地理的区分（全国を8地域に分ける）に基づいて行う——を踏襲している点で、同系列に位置づけられよう。

しかしながら明瞭な違いも示している。まず書名「わらべうた」に込めた意図である。浅野は「わらべうた」の特徴として6項目挙げた。その一は、長年に渡り庶民の子どもたちに継承されてきた唄で、素朴にして優雅な曲調・単純なリズムを有する。その二は、遊びのための唄が中心で、種類が多く変化に富む。また歌詞内容よりリズム本位。その三は、全国共通の唄が多く、郷土特有の曲調を持つ民謡と異なる。その四は、子守唄は子ども自身が歌う唄でなく、大人が子どもに歌って聞かせる唄である。その五は、昔の流行唄や長唄・端唄などと交流がある。その六は、特色・多彩・技巧性などを有する。すなわち「わらべうた」とは、遊びのための唄が中心で歌詞よりも曲や遊び方に本命があること、また後世に残すべき貴重な文化遺産であるという受け止めである。

こうしたわらべうた観に立ち、「わが国の現存わらべうたの中から伝承童謡（自然童謡）として、もっとも代表的と思われる曲約160篇を集成し、これに必要な解説と注釈を加え、曲譜の全部を掲載した⁸⁾」とこの書のコンセプトを述べる。すなわち、前著『日本伝承童謡集成』が伝承童謡の詩句に焦点を絞ったのに対し、本書は詞句と曲に、遊び方も含めた題材全体を対象としたこと、さらに、題材の選定にあたっては文化的かつ教育的な見地を導入したことである。それは次のような基準項目で明示された。

- 1 子ども同士の集団生活から自然発生的に生まれ出た唄で、それが長い年月の間に洗練され、淘汰され、今日まで伝承されて来たもの。

2 発生の年代も、作詞・作曲者も明らかでないが、すべて美しい曲節を遺存し、現在、わらべうたとして比較的、分布圏の広いもの。

3 詞・曲共に健全且つ優秀な唄で、将来永く国民の文化遺産として保存・育成に堪える古調のもの⁹⁾。

これによれば、登載例は子どもの集団生活をベースに持つ洗練された唄で、美しい曲節を保ち、健全且つ優秀な文化遺産として堪え得るものである。よって、伝承歌謡の一角を占める悪口唄や呪い唄、お座敷唄の類は排除されている。

前述したように本書の構成は、歌柄と地域の二要素から成る。要素の一つである歌柄は、遊戯唄その一、子守唄、天体気象の唄、動植物の唄、歳事唄、遊戯唄その二の6種が示され、分割されて置かれる遊戯唄一と二の相違は、玩具遊びと仲間による遊びとする。歌柄の種別自体は大よそ前著を踏襲するが、並び順において若干の違いを示す。例えば、玩具を持つ遊戯唄が子守唄の前の一番目に置かれ、集団で行う遊戯唄は最後の六番目に位置するというように。さらに本著の特徴は、以下に紹介されているような子細な分類細目と位相の導入にも見受けられる。

遊戯唄その一は、主として手毬唄・お手玉唄・羽根突唄など玩具を以てする遊びであるが、手毬唄は更に詞型により、これを(A)数え歌形式のもの、(B)物語形式のもの、(C)拍子本位のもの、の三種に分け、お手玉唄・羽根突唄も、ほぼ(B)(C)の順に掲載した。子守唄は慣用に従い、(イ)「眠らせ唄」と(ロ)「遊ばせ唄」の二に分け、天体気象の唄・動植物の唄・歳事唄も、なるべく四季の順に掲載するよう留意した。但し、「堅雪渡り」や「雪坂作り」の如き雪遊びの唄は、便宜上、天体気象の唄の〈雪〉の部に附載した。遊戯唄その二は、縄跳び・隠れんぼ・鬼遊び・手合わせ遊び等、主として集合遊戯に関する遊び唄である¹⁰⁾。

これらは、古典資料に通じる著者の識見に時代を看取した法則性・系統性を加味したことによる。例えば子守唄を寝かせ唄とあやし唄に区分したのは、行智の『童謡集』から想を得たもので、詩句をその内容から数え歌形式、物語形式、拍子本位と分別したこと、また四季という位相を歳事唄から他の唄へも広げたのは法則性や系統性を意識してのことと思われる。四季という基準の導入により、遊戯唄その一の〈手毬唄〉の最初は「正月門松」、天体気象の唄の最初は「風風あがれ」という配置になった。

地理的区分は、北海東北、関東、東海、北陸、近畿、中国、四国、九州の各地方で、全国を8地区に分割し、遊び例には都道府県名を付してある。前書との違いは、一部順序(北海東北と関東)を入れ替えたことであろう。

3 上笙一郎『日本のわらべうた——民族の幼なごころ——』について

上はこの書¹¹⁾を、自身の研究領域である児童文化と民俗学的方法的統一の視点から著したと述べている。初めに氏の「わらべうた」論について押さえてみよう。その一は、「わらべうた」とは成人の〈民謡〉に対し〈子どもにおける民謡〉とする。民謡が大人集団での作業効率を図るために発案された仕事唄とすれば、子どもの遊びをスムーズに展開させるために作られた「わらべうた」は〈子どもの民謡〉といえるのではないか。その二は、わらべ唄の創造及び伝承が子ども集団を媒体とする限り、定型を持つことなく無数の〈変型〉

として存在するという指摘である。例えば「かごめかごめ」遊びには様々な詩句例が残されているが、「すべてある特定の子ども集団の思想的・感情的な必要から変容されたもので、いずれもそれなりの必然性を持った〈変型〉¹²⁾」と捉える。

上はまた、わらべ唄を唄の目的に即して3類に分類する。第一類が遊びを目的として歌う唄、第二類が歌うことそれ自体を目的とする唄、第三類が仕事につながりを持つ唄である。これは、わらべ唄の分析に、あるいは構造化に資する興味深い視点の提起としても押えておきたい。さらに、氏は類ごとに詳細な区分化を行う。第一類は絵描き唄、おはじ唄、お手玉唄、羽根つき唄、毬つき唄、縄とび唄、手合わせ唄、からだ遊びの唄、鬼あそびの唄、その他の遊び唄と10区分、第二類は「女をいじめるやせ男」他の囃し唄や「さよなら三角」他の尻取り唄を含む口遊びの唄、「蝶々」「とんぼ」他の鳥や虫の唄、「げんげ」「茅花」他の草や花の唄、「お月さんいくつ」「つらら」他の月や星の唄の5区分、第三類は「お正月」「お雛さま」「鬼は外」他の年中行事の唄と子守り唄の2区分である。なお子守り唄は、「ねんころだけの子守り唄」他の眠らせ唄、「牛こ牛こ」他の遊ばせ唄、「守子というもの」他の子守娘唄と3区分されている。この子守娘唄という区分は他に例をみないので、仕事につながりを持つ唄という独特な分類設定に相当するものである。

氏は遊びの配置順についても基準を提起した。それは、

遊びの際のからだの動きとそれに伴うわらべ唄の単純なものを前のほうに置き、それから順次に複雑なものをならべてあります。すなわち、幼児にも十分に楽しむことのできる絵描き唄を最初にし、それからおはじ唄・お手玉・羽根つき唄（中略）・からだ遊び唄というふうにならべ、〈花いちもんめ〉や〈あぶく立った煮え立った〉など相当にむずかしい規則を持った鬼遊び唄を、終わりのほうに置いているのです。

お手玉唄・羽根つき唄・毬つき唄などを中程に位置させたのは、これらが、唄を見ると、ずいぶん花やかで複雑なような印象を受けるけれど、しかし遊びと唄のリズムの基本は割合に単純だからです。そしてどこにも入れにくいいくつかの遊び唄を、ひとくくりにして最後のところにまとめました¹³⁾。

とあるように、単純な遊びから難しいルールを持つ遊びへ、すなわち幼い子ども向けからより年長児向けといった発達の視点を、遊びの配置基準に取り入れたことを明らかにしている。

4 尾原昭夫『日本のわらべ歌』について

この書¹⁴⁾は、音楽理論・作曲専攻という音楽の専門領域を背景に持ちつつ日本の古典や歴史資料の研究に精励されてきた氏の労作であり、〈室内遊戯歌編〉と〈戸外遊戯歌編〉の二分冊から成る。ねらいとして、「この本は、比較的未開拓であった遊戯歌に重点を置き、古典的・歴史的なわらべうたはもちろん、現代のわらべうたにも採集の手を伸ばして、日本の伝承遊戯歌のおおかたを網羅するよう編集した¹⁵⁾」と述べているように、歴史資料上のわらべうたと現代のわらべうたの双方を範疇に納めたものである。それぞれに歌詞・曲譜・遊戯の方法を付し、語句の解説や類歌（古典資料にあるものも含む）を加えた。

本書の構成は、遊戯歌を中心としたわらべ歌を、遊びの場を切り口に二分したことに始まる。それは室内遊びと戸外遊びである。室内遊戯については、「全体の構成は、遊戯の種

類によってまとめ、それらを、おおむね乳児期から幼児期・児童期へと、児童の成長・発達段階にそって配列¹⁶⁾し、戸外遊戯については、全体構成は室内遊戯と同様にし、「おおむね遊戯法の簡単なものから、より複雑なものへと配列した¹⁷⁾」とする。これは、前述した分類法にも見られた手法で、ある意味時代を反映したものといえよう。これに関しては、同著の巻頭言『『日本のわらべうた』に寄せて¹⁸⁾』中で、町田佳声が「一驚した」と記している。特に、赤ん坊をあやす歌から始めるというのは面白いアイディアだと。

室内遊戯は、「いないいない」「にぎにぎ」他の〈遊ばせ歌〉、「あがり目さがり目」他の〈顔遊び歌〉。〈手遊び歌〉には、「こどもとこどもと」他の《指遊び》、「茶々つぽ茶つぽ」他の《手遊び》、「ずいずいずっころばし」他の《鬼決め》、「らかんさん」の《物まね遊び》、「たなわたし」他の《指輪まわし》、「じゃんけんほかほか」他の《じゃんけん》と細目があり、〈おはじきうた〉〈風船つきうた〉〈竹がえしうた〉〈あやとりうた〉〈手あわせうた〉〈絵かきうた〉〈いしなごうた〉〈お手玉うた〉と並ぶ。〈手まりうた〉は「一つとや」「よろず吉原」他の《近世・近代》と「一番はじめは」「いちりとら」他の《現代》に区分けされている。

戸外遊戯は、〈鬼遊びうた〉〈子もらい遊びうた〉〈輪遊びうた〉〈列遊びうた〉〈くぐり遊びうた〉〈押し合い遊びうた〉〈馬乗り遊びうた〉〈片足とびうた〉〈なわとびうた〉〈ゴムとびうた〉〈ぶらんこ遊びうた〉〈各種遊びうた〉と分類されている。特に〈鬼遊びうた〉はさらに11に分けられている。すなわち、「鬼ごっこするもの」の《仲間集め》、「かごめかごめ」他の《人当て鬼》、「かくれんぼするもの」他の《かくれ鬼》、「子とり子とり」他の《子とり鬼》、「鬼のいないまに」他の《つかまえ鬼》、「となりのおばさん」他の《宿とりつかまえ鬼》、「山のコンコンさん」他の《演技・つかまえ鬼》、「鬼さんこちら」他の《目かくし鬼》、「かま鬼」他の《げたとり鬼》、「橋の下のしょうぶ」他の《ぞうりかくし》、「木ぐいかくし」の《ごみかくし》、「一さら二さら」の《鬼きめ》である。

こうした詳細な分類は、さらに精緻な分類へと続く。一例として「かごめかごめ」をみてみよう。この遊びは、戸外遊戯の〈鬼遊びうた〉の、さらに《人当て鬼》の一つに置かれている。現在普及している遊び方はうしろの正面型で、他に文献上ではくぐり型、目かくし鬼型、だれのうしろ型、かごの鳥型、身ぶり型と計6種類あるという。それぞれの遊び方を検証した結果、最も古い型としてかごの鳥型、続いてくぐり型、派生型として身ぶり型、また新しい型として目かくし鬼型、だれのうしろ型、うしろの正面型が生成したという歴史的变化の道筋も示している。このような分類方法の提起に関しては、浅野が『日本のわらべうた戸外遊戯歌編』のまえがき『『日本のわらべうた』に寄せて』の中で、「音楽の専攻者には珍しいほど、先学の遺した研究文献を渉猟している態度は実にりっぱである。上述の岩波文庫『わらべうた』を総論の書とすれば、本書は各論的な役割を十分果たしている¹⁹⁾」と評価しているが、それ以上に、遊びの平面的分類という横軸に歴史の変遷という縦軸を加え、伝承遊びの世界を壮大な時空間の中で捉えようとしたところに氏の分類の本質があると筆者は考える。

5 小泉文夫『わらべうたの研究』について

この二分冊の大著²⁰⁾は、民族音楽研究家の小泉がチームを編成し、東京を中心としたわ

らべうたの収集（歌詞・曲・遊び方）を実施した結果報告書であり、それを視野に据えたわらべうたの研究書でもある。まず、遊び例の収集調査に取り掛かるにあたり、膨大な資料の集約方法として小泉は独創的な分類法を考案した。初めに、こうした発想の基となる氏の音楽的視座について紹介しておこう。

子どものうたというのは、私の専門ではありませんが、十年くらい前から、二つの点で興味をもったのです。

一つは、子どものうた、（おとながこしらえて、子どもにうたわせているうたは除く）子どもが自発的にうたい出したうた、あるいは、元々おとなが作った学校のうただとか、童謡だというものであっても、それを子どもが実際の生活の中で遊戯に使っているもの、あるいは悪口うたにして、替うたを作ったものなどの音楽性を調べてみますと、その中にはその民族のもっているもっと高級な古典音楽（日本の場合でいいますと、能、義太夫、常磐津、清元といった高級な芸術音楽）ときわめて密接な関係があることがわかりました。日本音楽を調べようと思い、いきなり、能、義太夫などに取り組みますと、その構造が非常に複雑で、何が基本になっているのかよくわかりません。しかし、わらべうたには、子どもが自然につかんでいる音感が、基礎にあって、それがうたの中で変化しているという形が存在しているので、ある民族の本当の特徴はどこにあるかを調べる時、そのものをすぐとり上げるより、はじめにわらべうたの研究をすることが役立つのです。研究の方法論の上で興味をもっているのです。

第二にはわらべうたそのものを調べてみると、その構造は法則性を持っています。おとなが漠然と考えている以上に、例えば単純から複雑へといった発達段階をもっています²¹⁾。

これをみると、日本、並びに世界の民族音楽の研究を視界に置いた上で、子どものうた、わらべうたを研究するという位置づけを持っていること、子どものうたを多様な音楽的次元から捉え、その中にそれぞれの民族音楽に通じる法則性やそれ自体がもつ構造化性を見出そうとしていることが分かる。

また、わらべうたについて次のような見解も示している。

子どものうたには、たくさんの種類があります。ご注意申し上げておきますが、「わらべうたは古いもの、昔のもの、なつかしいものだ。現代の子どもがうたうものではない」と考えている人がいるでしょう。そういう時、私はその人たちに、こう言います。「あなたたちにとって、わらべうたは、古くて、なつかしいものかもしれない。なぜならあなたたちは古いから」と、しかし、子どもにとっては、古いものでも、なつかしいものでもない。そして現に、子どもはうたっています。（中略）

つまり古いものが古いまま、残っているのではないのです。わらべうたは、遊びに使われるのですから、多くのものは遊びにあうようにかわっていきます²²⁾。

わらべうたが多様に変化することは、その特徴として広く認められてきたが、「新しいものに古いものが入ってくるし、古いものに新しいものが入ってきて、新しい、古いがなくなる、これがわらべうたです²³⁾」

こうした氏の「わらべうた」論は、時代の真っ只中に生きているその時々の子どもの遊びに着眼し、世界中の民族音楽（わらべうたを含む）の収集と研究に命を賭した小泉ならではのものといえよう。

氏の分類法は、遊びの形状や遊びの方法を基に種別化するこれまでの方法を踏襲するものだが、それらに番号を付すところに特徴を持つ。「世界の子どものうた」の論考²⁴⁾、合わせて加筆・補訂の上『子どもの遊びとうた²⁵⁾』に記述された箇所から具体的に紹介してみよう。まず、第一次分類として“単純なものから複雑なもの”への基準から遊びを形態別に10項目（となえうた、絵描きうた、おはじき・いしけり、お手玉・羽根つき、まりつき、なわとび、じゃんけん、お手合わせ、からだ遊び、鬼遊び）化し、それぞれに0から9まで一桁の番号を付す。次に第二次分類として、項目ごとに遊び方の“単純なものから複雑なもの”へ、さらに10項目化する。一次分類と二次分類合わせて二桁の数字を作り、遊びを00～99までの100に分類する。こうして作成された氏のわらべうたの分類表を以下に示す。

わらべうたの分類

0 となえうた	1 絵かきうた	2 おはじき・石けり など	3 おてだま・はねつき など	4 まりつき
00. 数をかぞえるうた	10. 字（文字、数字）のみ を用いて書くもの	20. おはじき	30. おてだま・空中にほう りあげる（1人）	40. 基本形型
01. かぞえうた	11. ものの形によって書く もの	21. 石けり	31. おてだま・空中にほう りあげる（2人）	41. あんたがたどこさ型
02. となえうた （約束、ものえらびを 含む）	12. 字とものの形の混合し たもの	22. こま	32. おてだま・「おさらい」 （下に置いてあそぶ）	42. いちもんめのいすけさ ん型
03. わるくちうた・はやし ことば	13. 字を書きあげるもの	23. かんけり	33. はねつき—1人	43. 基本型を欠く型
04. しりとりのうた・頭輪あ わせ・もじりうた	14.	24.	34. はねつき—2人	44. さっさ型
05. はやくちことば	15.	25.	35. ふうせん	45. 支那の町型
06. 暗記うた	16.	26.	36. 竹なんぼん	46. リレー型
07. 替えうた	17.	27.	37. 小石あそび	47. グループ対抗リレー
08.	18.	28.	38. けん玉	48. ジェスチャー型
09.	19.	29.	39.	49. 正座型
5 なわとび・ゴムな わ	6 じゃんけん、グー ・チョキ・パーあそび	7 お手あわせ	8 からだあそび	9 鬼あそび
◆ なわとび ◆	◆ じゃんけん ◆	70. 純粋なお手あわせ	80. 指・手あそび	90. 追いかけ鬼
50. 1人とび	60. 基本的じゃんけん	71. 他のあそびに用いられ るお手あわせ	81. 顔あそび	91. かくれんぼ
51. 1人とびの追いかけ 鬼	61. 手と足以外のじゃんけ ん	72. グー・チョキ・パーあ そびと結合したもの	82. 手と腕あそび	92. ひっこぬきあそび
52. 順番とび	62. 条件つきじゃんけん	73. じゃんけんあそびと結 合したもの	83. 足・からだあそび	93. 箇所あそび
53. おじょうさん型 （2人とび）	63. 2グループじゃんけん （リレーじゃんけん）	74. ジェスチャーあそびと 結合したもの	84. 手あそびに他の要素が 結合したもの	94. 人あて鬼
54. おじょうさん型 （大勢とび）	64. ジェスチャーつきじゃ んけん（準備運動の部 分が省略し、様々な動 作が加わったもの）	75.	85. 階段とび	95. 予もらいあそび （単純なもの）
55. ジェスチャーとび	◆ グー・チョキ・パー あそび ◆	76.	86. 図型とび	96. 予もらいあそび （複合的なもの）
56. 問答型	65.	77.	87.	97.
57. 変形波とび	66. 出せだせあそび	78.	88.	98.
◆ ゴムなわ ◆	67. グー・チョキ・パーゴ ー	79.	89.	99.
58. ゴム段とび	68. グリコ・バイナツブル あそび			
59. ゴムおもつれ	69.			

出所：小泉文夫編『わらべうたの研究 研究編』

表中の空白部分は、今後充当される余地を残している。具体的な遊び事例は、80 指・手あそびの場合、80,0「子供と子供とけんかして」、80,1「あんた ちょっと みかけによらない」、また 94 の人あて鬼の場合、「かごめ」(94,0)、「坊さん 坊さん」(94,1)、「かりうどさん」(94,2)、「銭まわし」(94,3) というように、小数点以下の数字を付した番号を振っている。

まとめに代えて

以上、4 者は、戦後間もなく出版された北原白秋編『日本伝承童謡集成』に示された伝承童謡の分類型を、江戸時代からの定型的な方式として押さえた上で、それぞれに新たな分類方法を提起した。町田嘉章・浅野健二の『わらべうた』は、北原白秋の『日本伝承歌謡集成』が伝承歌謡を広範に捉え、それらの詩句面に視点を当てた資料集であったのに対し、伝承歌謡の中の童子の遊び唄、すなわち「わらべうた」に視点を当てた研究書としての一步を刻んだ。分類法自体は先行書を踏襲しつつも、「わらべうた」の中心を遊戯唄として、1 位の子守歌を 2 位に下げ、後方にあった遊戯唄を 1 位にした。ただし、遊戯唄の中の 1 位は〈手毬唄〉で変わらない。上笙一郎の『日本のわらべうた』は、遊びを目的とした唄を第一に考慮し、初めて絵描き唄を登載させ、それを第 1 位に置いた。それまでトップを占めていた毬つき唄を 5 位に下げ、子守唄は最後尾に置いた。また、尾原昭夫の『日本のわらべ歌』は、子守歌から〈遊ばせ歌〉を取り出してトップに置いた。残りのいわゆる子守歌は遊戯歌でないことから掲載していない。小泉文夫の『わらべうたの研究』には子守歌という項目そのものがない。トップはとなえうたである。氏の調査は対象を小学生に絞ったためか、子守歌やあやし歌のようなものはどこにも登場していない。以上、全体の傾向として、詩句重視の歌謡から子どもの遊び（時代を反映した遊び）歌に比重が置かれ、自然との交歓歌や歳事歌が激減した。また、法則性を意識し、系統的な分類への志向が強まったこと、その際、発達の視点（遊戯法の単純なものから複雑なものへ、幼い者向けから年長者向けへ）が一つの基軸となったことなどが大よその傾向として見て取れる。

各氏はそれぞれの専門領域を背景に、個性的な分類法を提起した。また、当然のことながら、テーマを共有するという地平上、相互に研究し合い、分類方法の類似点、相違点を含め、触発し合っていることも明らかになった。「伝承童謡」「伝承遊び」ないし「わらべうた」という対象についての立論は勿論のこと、分類法という視点からそれぞれの論を比較をすることで、収穫は大きかった。分類という作業は、一つひとつの小さな、具体的な詩句や遊びを仕分けていくという実に丹念な細かい、しかも根気を要する労作である。しかし、それは全貌を視界に捉えるという大きな成果に繋がっているのも事実である。すなわち伝承遊びの構想や構造化に欠くべからざるものといえよう。今後さらに、この視点からの考察を進めていきたい。

注

- 1) 「保育のための遊び研究考」として、〈はないちもんめ〉〈ことしのぼたん〉〈あぶくたった〉〈かごめ〉〈通りゃんせ〉〈子とろ子とろ〉〈草履隠し〉のわらべうた遊びを、『鹿児島女子短期

- 大学紀要』第23号（1998年）と『豊橋創造大学短期大学部研究紀要』第7号～第16（2000年～2009年）号に掲載。
- 2) 大森隆子「伝承遊び研究考(1)——「伝承遊びの定義」について——」（『相山女学園大学研究論集』第39号 人文科学篇, 2008年）
- 大森隆子「伝承遊び研究考(2)——「伝承」という語について——」（同上 第40号, 2009年）
- 大森隆子「伝承遊び研究考(3)——「遊び」という語について——」（同上 第41号, 2010年）
- 3) 北原白秋編 藪田義雄編纂校訂責任『日本伝承童謡集成』国民図書刊行会, 1947年～1950年。
- 4) 北原白秋編 藪田義雄編纂校訂責任『日本伝承童謡集成 第一巻 子守唄篇』三省堂, 1974年, pp373～374。
- 5) 北原白秋編 藪田義雄編纂校訂責任者『日本伝承童謡集成』全六巻, 三省堂, 1974年～1976年。
- 6) 前掲『日本伝承童謡集成 第一巻 子守唄篇』p376。
- 7) 町田嘉章 浅野健二篇『わらべ歌』岩波書店, 1962年。
- 8) 同上, p3。
- 9) 同上。
- 10) 同上, pp4～5。
- 11) 上笙一郎『日本のわらべうた』三省堂, 1972年。
- 12) 同上, p10。
- 13) 同上, p28。
- 14) 尾原昭夫『日本のわらべ歌 室内遊戯歌編』社会思想社, 1972年。尾原昭夫『日本のわらべうた 戸外遊戯歌編』社会思想社, 1975年。
- 15) 前掲『日本のわらべ歌 室内遊戯歌編』p4。
- 16) 同上。
- 17) 前掲『日本のわらべ歌 戸外遊戯歌編』p4。
- 18) 前掲『日本のわらべ歌 室内遊戯歌編』p1。
- 19) 前掲『日本のわらべ歌 戸外遊戯歌編』p2。
- 20) 小泉文夫編『わらべうたの研究』[わらべうたの研究] 刊行会発行, 稲葉印刷所, 1969年。
小泉文夫編『わらべうたの研究 研究編』同上。
- 21) 小泉文夫「世界の子どもの歌」（『幼児の教育』1968年12月号所収）pp2～3。
- 22) 同上, pp4～5。
- 23) 前掲「世界の子どもの歌」。
- 24) 小泉文夫『子どもの遊びとうた』草思社, 1986年。